

解題

わたしの雑詠が始まった経緯は、この「徐山猿声」巻の一（一九八八年）の序に書いた。それが続いて年ごとに冊子になつていったようすも、続く巻にたどることがができる。それを九巻で一区切りにしたのは、十になる前に気分を一新して、まだまだわたしの歩みが続くという気分がしたからである。夏目漱石は、漱石という号を二十歳ごろにつけて終生それを用いた。自身の在り方を表わしていて、歳をとった後にも、それがふさわしいと考えたのである。文学的な才はないのに、わたしも面白半分に「徐山」という号をひそかにつけて、計算機のニックネームにしていた。『孫子』の「…、其徐如林、…、不動如山」という有名な文から、文字を選んだ。風と火を秘めてというところであつた。少し歳をとったら飽きてきて、名の谷川から連想する水という語をつけようと考えた。春水はわたしに合わないと思うから、秋水ということにした。谷川の秋の水である。幸徳がその名を名乗っているが、決してそのような切れ味を望んだのではない。もちろん、漱石ほどの諧謔と自己規定もない。高杉晋作が西行の向こうを張って東行と号したほどのことでもない。

一九九七年に雑詠日記をまた新しく巻の一から始めるに当たって、区別のため

に「秋水泡語」という表題をつけることにした。わたしの雑詠は谷川を流れる水の泡のようなものというつもりであつた。そうすると、それまでに出来た九冊の冊子に名をつけたくなる。しかし、それらの雑詠は習作として始まつたものになさぬ上に、まだ人間の悩みを消せず秋の澄んだ水にも及ばない。というわけで、九冊になつた冊子の集まりに、『徐山猿声』という名をつけた。急いでつけたせば、「秋水泡語」もその表題がもつ可能性からはほど遠い。谷川の水が故郷の海辺に流れ着いて、今では海の蝶となつてまだ歌を詠み、「海蝶夢話」という夢のような話を語っていることは、「白江庵雜記」と名付けたホームページに書いた。

三篇とも古風なタイトルになつたけれども、わたしの一般的な趣味は古風ではないと思つてゐる。しかし、名は体を表わすというから、新しくはないのかもしれない。伝統から離脱できない俳句や短歌だけではなく、文体もモダンではないのだろう。限界を知らされる。そこではことば書きのように、詩や文学に係する言葉を引用している。それは、わたしの歌を補強してくれるかもしれないという期待から来ているだろう。かならずしも文学だけを讀んでいるわけではない。むしろ背伸びして、のろいけれど、さまざまなジャンルの書物を読もうとしている。歌に唐突なことばが出てくるのは、その影響からだ。

名の通り雑多なうたを並べたものを、読んでくださる方がいるだろうか――と、
今つぶやいています。

二〇一〇年 三月

谷川 修

